

NICUに入院した児の母親と正常分娩をした母親の 不安・愛着の比較

下田 あい子¹⁾ 戸部和代²⁾ 今関節子³⁾ 横田正夫⁴⁾

A comparison of the levels of attachment and anxiety between mothers with an infant hospitalized in newborn intensive care units and that delivered an infant with normal labor

Aiko Shimoda¹⁾ Kazuyo Tobe²⁾ Setuko Imazeki³⁾ Masao Yokota⁴⁾

要 旨

本研究は、NICUに入院した児を持つ母親の愛着を明らかにすることを目的とした。対象は、NICUに入院した児を持つ母親55名と正常分娩をした母親85名である。NICUに入院した児を持つ母親には、子どもに2～3回面会した後に、正常分娩をした母親には出産5日目に胎児感情調査用紙・母性意識調査用紙・日本版STAIを1セットにし自記式調査を実施した。日本版STAIによる不安の検討では、NICUに入院した児を持つ母親の特性不安は、普通のレベルに、状態不安は高いレベルに位置しており、正常分娩をした母親よりいずれも有意に高かった。母性意識は、社会理念因子・生きがい因子に分けて得点化し、NICUに入院した児を持つ母親と正常分娩をした児の母親の間で比較したが、いずれにおいても有意な差は認められなかった。対児感情は、接近因子・回避因子に分けて得点化し、NICUに入院した児を持つ母親と正常分娩をした母親の間で比較したが、いずれにおいても有意な差は認められなかった。しかし因子間の相関係数を算出したところ、その構造に違いを認めた。NICUに入院した児を持つ母親では、不安の高い母親は社会理念も高く、生きがいの高い母親は児への接近傾向があり回避傾向は低かった。これに対し正常分娩をした母親では、生きがいが高い母親は児への接近傾向も社会理念も高い傾向にあり、逆に回避傾向は低い傾向がみられた。このように、NICUに入院した児を持つ母親と正常分娩をした母親の愛着の構造には違いを認めるため、児のケア（タッチング・カンガルーケア・おむつ交換など）への参加が、NICUに入院した児を持つ母親の生きがいに結びつくよう支援することの重要性が示唆された。

キーワード：NICU，母親，愛着，不安

Received July 30, 2001 Accepted September 12, 2001

1), 2) 群馬県立小児医療センター Gunma Children's Medical Center

3) 群馬大学医学部保健学科 Gunma University School of Health Sciences

4) 日本大学文理学部心理学科 Nihon University Department of Psychology, College of Humanities and Sciences

Abstract

The objective of this study was to investigate the attachment that a mother feels her infant when the child is hospitalized in a newborn intensive care unit (NICU)

The subjects in this study consisted of 55 mothers with infants in the NICU (NICU group) and 85 mothers who delivered an infant during normal labor (normal labor group). A questionnaire on maternal feelings, maternal consciousness and the Japanese version of the state-trait anxiety inventory (STAI) was distributed to mothers in the NICU group after they had seen their child in the NICU a few times and to mothers in the normal labor group five days after delivery. A statistical analysis of the survey results showed a normal level of trait anxiety and a high level of state anxiety in the NICU group, both significantly higher than in the normal labor group. Maternal consciousness was scored in terms of social awareness and personal fulfillment, no significant differences in either of the two categories were noted between the groups. Maternal feelings was assessed by evaluating feelings of closeness and avoidance, no significant differences in either of these two categories were found between the two groups. Correlations between individual factors, however, differed between the two groups. Mothers in the NICU group with higher anxiety scores also exhibited higher levels of social awareness, while mothers with higher personal fulfillment scores had stronger feelings of closeness to their infant. In the normal labor group, however, mothers with higher personal fulfillment scores had stronger feelings of closeness to their infant as well as a higher level of social awareness. These differences in the attachment of mothers to their infants between the two groups suggest that appropriate counselling should be made available to mothers with infants who have been hospitalized in the NICU, to insure that child care (skin contact, hugging, soothing, changing diapers, etc) enhances their sense of fulfillment.

Keywords : NICU, mother, attachment, anxiety

I. はじめに

母と子の愛着については、Bowlby¹⁾、Ainsworth²⁾、Klaus&Kennell³⁾、Spitz⁴⁾ら多くの理論家により、母と子の両者間の2方向性の関係の中での反応として論じられ、子を産み育むための必要要件であるとされている。また愛着が形成されるか否かは乳児と母親との間で営まれる「相互関係の量」^{1) 5)}であるとの提言もあり、出産直後より医療の介入により母子分離を余儀なくされ、反応性が乏しく、生命的危機状態にあるNICUに入院した児の母親は、出産に対し喪失感・失敗感を抱き子どもへの愛着形成が困難であるとされている⁶⁾。精神分析的発達論^{7) 8)}においても、母親による授乳や抱っこなどのケアは、乳児が対人関係

の基盤となる基本的信頼感を抱くための重要な体験であると考えられており、乳幼児の欲求を感じ取りつつ、それにゆとりをもって応える母親は、乳児のなかに基本的な信頼感をはぐくむ大切な存在として捉えられている。そのためNICUにおいては、母親の不安の早期ケア・子どもへの早期接触が行われており、そのことが子どものその後の体と心の発育・発達の促進とともに母親の母性を育てる面からも重要とされている。我々は、NICUに入院した児を持つ母親の不安について、STAIにもとづいた量的検討と自由記述式アンケートによる質的検討を重ねてきた。これらの研究において母親は高不安状態にあるが、出産早期より生命の感動・生命への期待といった児に対する積極的な感情が混在している^{9) 10)}ことが

明らかになり、もともと愛着の芽は母親自身が持っていると考えられた。しかし、多くの研究より児の愛着の対象がおもに母親であることが明らかにされてきたにもかかわらず、その母親がわが子への愛着をいかに発達させていくかについて、特にこうした高不安の母親における児への愛着についてはほとんど検討されてこなかった。これは母親の愛着は、表出される行動と必ずしも直接的に結びつくものではないため、明確な答えを出すだけの実証的資料が少なく愛着を評価することが難しい¹¹⁾¹²⁾ ことからいえる。我々は先行研究の中で、NICUに入院した児の母親の不安は、入院当初より比較的速やかに解消されてゆくことから、母親が児へ愛着形成するために、母親の児へのポジティブな感情が影響していると考えた。つまりNICUに入院した児の母親の母性が通常の母親の母性と本質的に異なるものでないため、NICUに入院した児の母親に愛着が形成されるのは自然なことであろうと考察した。これまで我々は、母親の愛着を声かけや皮膚接触といった児への肯定的・積極的行動と早期からの搾乳や母乳の運搬、児への同情といった母親としての自覚・母性意識により推測してきた。そこでNICUに入院した児の母親と正常産の母親との間に同じような愛着が形成されているか、高不安状態にある母親の愛着（胎児感情・母性意識）と不安がどのような関係にあるかを数値的に明らかにすることを目的に、アンケート調査を実施し、分析・評価した。その結果、児への愛着は、正常分娩をした母親が持つのと同様にNICUに入院した児の母親も持っているがその構造に違いがあることが明らかになったので報告する。

Ⅱ. 用語の定義

本稿では、高不安とは、日本版STAIの判定基準のもとに、女性では状態不安は42点以上、特性不安は45点以上とした。対児感情とは、児に対する感情で、児を肯定し受容する方向の感情を接近感情、児を否定し拒否する方向の

感情を回避感情とした。また、母性意識とは、母性自覚と母性理念とを包括した概念とし、母性とはこういうものであるといった社会理念を表している感情を社会理念、女性が子育てや妊娠を自らの生きがいとして引き受けるといったことにかかわり母親の生きがいを表している感情を生きがいとした。

Ⅲ. 研究目的

- (1) NICUに入院した児の母親と正常分娩をした母親の愛着と不安の差を明らかにする。
- (2) NICUに入院した児の母親の子どもの入院初期における不安・愛着（胎児感情・母性意識）の関係を明らかにする。

Ⅳ. 研究方法

1. 調査対象

調査対象は研究の目的、プライバシー保護について文章で説明し同意の得られた当NICUに入院した児の母親55名と群馬県内にある産院において正常分娩をした母親85名であった。

2. 調査方法

調査方法はNICUに入院した児の母親には2～3回面会した後に、正常分娩をした母親には出産5日目に対児感情調査用紙・母性意識調査用紙・日本版STAIを1セットにし自記式で個別に依頼し後日回収した。

調査期間は1999年4月～12月であった。

3. 調査内容

1) 面会時の不安の調査

母親が児に2～3回面会した後の不安の程度を調べるために日本版STAIを使用した。状態不安項目と特性不安項目の得点を算出した。

2) 対児感情

対児感情を調べるために、花沢¹³⁾の対児感情項目の因子構造を検討した横田・花沢¹⁴⁾らによる対児感情評定尺度を使用した。この尺度は、愛着的感情をみる接近項目と否定的感

情をみる回避項目から構成されており、各項目に対し「そんなことはない」「少しそのとうり」「そのとうり」「非常にそのとうり」のそれぞれに1から4点を配点し算出した。横田・花沢らの接近因子に含まれる接近項目について得点を合計したものを接近因子得点、横田・花沢らの回避因子に含まれる回避項目について得点を合計したものを回避因子得点とした。(表1)

3) 母性意識

母性意識を調べるために、花沢¹³⁾の母性理念質問紙の項目の因子構造を検討した横田・花沢¹⁴⁾らの母性理念質問紙の項目を使用した。この質問紙は、母性意識の肯定項目と否定項目から構成されており、各項目に対し「非

常にちがう」「ちがう」「どちらともいえない」「そう思う」「非常にそう思う」のそれぞれに対し肯定項目では1～5点を否定項目では5～1点を配点し得点を算出した。横田・花沢らでは母性意識は、社会理念因子と生きがい因子から構成された。それらに含まれる項目を合計し、それぞれ社会理念因子得点、生きがい因子得点とした。(表1)

4. 分析方法

- 1) NICUに入院した児の母親と正常分娩をした母親のSTAIの状態不安得点・特性不安得点、対児感情の回避因子・接近因子および母性意識の社会的理念因子・生きがい因子の得点を両群間で比較した。(t検定)
- 2) NICUに入院した児の母親と正常分娩をし

表1. 胎児感情(接近・回避)・母性意識(社会理念・生きがい)項目内容

接近項目	やさしい、みずみずしい、うつくしい、すばらしい、ういういしい、あまい、うれしい、たのしい、いとおい、まるい、あかい、いじらしい、しろい、おもしろい
回避項目	やかましい、めんどくさい、わずらわしい、うるさい、いらだたしい、うっとしい、むずかしい
社会理念項目	赤ちゃんを産むことができるのは、女の特権である。 赤ちゃんを産んでではじめて、子どものかわいさがる。 女は子どもを産むことで、自分が生きた証を残すことができる。 どんなことをしても、赤ちゃんは母乳で育てるべきである。 子どもを産んで育てるのは、社会に対する女の務めである。 女は子どもをもつことで、人生の価値を知ることができる。 育児は女に向いている仕事であるから、するのが自然である。 子どもを産んで育てなければ、女に生まれた甲斐がない。 子どもがいることで、家庭生活はより楽くなる。 わが子の成長を見とどけるために、長生きしなければならない。 母親がわが子を自分の一部だと感じるのは当然である。 わが子のためなら、自分を犠牲にすることができる。 子どもをそだてるのは、生みの母が最良である。 育児に専念したいというのが、女の本音である。 母親が子どもの成長を生き甲斐にするのは間違っている。
生きがい項目	妊娠は、女にとってすばらしい出来事である。 赤ちゃんを産むことができるのは、女の特権である。 妊娠した自分の姿は、想像するだけでみじめである。 結婚生活を楽しむためには、子どもをつくらないほうがよい。 子どもを産んで育てることは、自分自身の成長につながる。 子どもがいることで、家庭生活はより楽くなる。 育児に追われていると、若さが早く失われる。 育児から開放されるときに、人間らしい自由な生活ができる。 わが子の存在を感じるだけで、毎日の生活に張りが出る。

た母親のそれぞれにおいてSTAIの状態不安得点・特性不安得点、回避因子得点、接近因子得点、社会的理念因子得点、生きがい因子得点の間におけるピアソンの相関係数を計算した。

IV. 結果

1. 不安においては、特性不安得点はNICUに入院した児の母親は 42.3 ± 6.6 で普通のレベルに位置し、正常分娩をした母親も 38.9 ± 8.7 で普通のレベルに位置し、両者の間には統計

表2. NICU児の母親と正常児の母親のSTAI得点による状態・特性不安の比較

	NICU児の母親 N=55	正常児の母親 N=85	t検定
状態不安	45.2(±10.6)	36.3(±7.9)	**
特性不安	42.3(±4.2)	38.9(±8.7)	*

* p<0.05 **p<0.001

表3. NICU児の母親と正常児の母親の対児感情の比較

	NICU児の母親 N=55	正常児の母親 N=85	t検定
接近感情 Mean(S.D.)	30.8(±5.3)	32.6(±5.4)	ns
回避感情 Mean(S.D.)	5.9(±1.6)	6.1(±1.9)	ns

表4. NICU児の母親と正常児の母親の母性意識の比較

	NICU児の母親 N=55	正常児の母親 N=85	t検定
社会理念 Mean(S.D.)	53.2(±6.3)	53.2(±5.7)	ns
生きがい Mean(S.D.)	38.2(±3.5)	37.1(±4.2)	ns

表5. NICU児の母親の不安・対児感情・母性意識の相関関係

	不安 (STAI)		対児感情		母性意識	
	状態不安	特性不安	接近感情	回避感情	社会理念	生きがい
特性不安	0.821**		0.125	0.015	0.268*	0.003
状態不安			0.061	-0.086	0.249*	0.048
接近感情				-0.173	0.053	0.391**
回避感情					-0.005	-0.456**
社会理念						0.219

+ p<0.1 * p<0.05 **p<0.01

学的な有意差を認めた。状態不安得点では、NICUに入院した児の母親は 45.2 ± 10.6 で高いレベルに位置し、正常分娩をした母親は 36.3 ± 7.9 で普通のレベルに位置し、両者間には統計学的な有意差を認めた。(表2)

2. 対児感情得点においては、接近因子・回避因子いずれもNICUに入院した児の母親と正常分娩をした母親の2群間に統計学的な有意差は認めなかった。(表3)

3. 母性意識得点においては、社会的理念因子・生きがい因子のいずれもNICUに入院した児の母親と正常分娩をした母親の2群間に統計学的な有意差を認めなかった。(表4)

4. 相関係数においては、特性不安得点と状態不安得点 (NICU児の母親 0.821, 正常児の母親 0.634)、生きがい因子得点と接近因子得点 (NICU児の母親 0.391, 正常児の母親 0.486) 回避因子得点 (NICU児の母親 -0.456, 正常児の母親 -0.317) において、NICUに入院した児の母親と正常分娩をした母親のいずれにおいても有意な相関関係を認めた。またNICUに入院した児の母親では、不安得点と社会理念因子得点 (特性不安 0.268, 状態不安 0.249) において有意な相関関係を認めた。正常分娩をした母親では有意な相関関係は、特性不安得点と接近因子得点 (-0.225) 生きがい因子得点 (-0.357)、状態不安得点と接近因子得点 (-0.251) 回避因子得点 (0.217) 生きがい因子得点 (-0.271)、接近因子得点と社会理念因子得点 (0.252)、社会理念因子得点と生きがい因子得点 (0.409) のそれぞれの間認められた。(表5・表6)

表 6. 正常児の母親の不安・対児感情・母性意識の相関関係

	不安 (STAI)	対児感情		母性意識	
	状態不安	接近感情	回避感情	社会理念	生きがい
特性不安	0.634**	-0.225*	0.168	-0.147	-0.357**
状態不安		-0.251*	0.217*	-0.071	-0.271*
接近感情			-0.178	0.252*	0.486**
回避感情				-0.162	-0.317**
社会理念					0.409**

* p<0.05 **p<0.01

V. 考 察

1. NICUに入院した児を持つ母親と正常分娩をした母親の不安

不安調査において、NICUに入院した児を持つ母親の状態不安得点は高いレベルに位置し、正常分娩をした母親より有意に高かった。また特性不安得点においても、NICUに入院した児を持つ母親・正常分娩をした母親ともに普通のレベルに位置していたが、NICUに入院した児を持つ母親の方がより有意に高かった。状態不安は有害なものとして判断したとき短時間に誘発される不安な状態であり、特性不安は人格とも言うべき生来もっている不安な状態であるため、NICUに入院した児を持つ母親が、正常分娩をした母親に比べ状態不安・特性不安とも高いということは、不安傾向が高くなっているだけでなく、状態不安が高いことによつて、日常的にも不安の高い状態にあることを反映している。つまり児の入院という出来事は、母親の人格特性にも影響を与えるほど強いということであろう。これらの結果は、今までの不安調査結果と一致している¹⁰⁾。

2. NICUに入院した児を持つ母親と正常分娩をした母親の愛着

本研究のNICUに入院した児の母親は高不安状態にあったが、胎児感情と母性意識は正常分娩をした母親のそれらとほとんど同様のレベルであった。原田¹⁰⁾の極低出生体重児の母親の愛着の研究においても、母親の愛着の情動面は初期から比較的高いことが示唆されている。これらのことは、母親が児の誕生に対し健康的でポ

ジティブな感情を持っていることを意味し、正常分娩をした母親と同様に喜びを持ち合わせていると考えられる。児のNICUへの入院は母親の期待に反する出産と考えられ、母親は児の入院により児の誕生を喜び祝福を受ける間もなく高不安な状況に置かれることになる。また出産に対し失敗感・罪責感を抱き、女性としての自信を失なうと同時に周囲の目が一時的に子どもに向かうことで、孤独感も味わうと考えられる。しかし今回の結果では、こうした母親であっても子どもへの愛着は、正常分娩をした母親と同様のレベルで生じていた。しかし児のNICU入院による母子間の相互作用が困難な状況は、母親の対児感情・母性意識に影響を与え母性の発達を遅らせ子供との関係に困難を生じる可能性がある。これは、高不安状態で自己不全感を持つ母親が、活動性・反応性に乏しい子どもの特徴を捉え敏感に反応することが困難なためである。看護者も母親が高不安にあることに関心を向け、それへの対処を重視している。また子どもが入院したため「おめでとう」は不謹慎という捕らわれがある。しかし、多くの母親は、産科スタッフ・NICUスタッフから「おめでとう」の言葉がかかることなく、病児を出産してしまった母親として自らを否定してしまったり、否定される状況に追い込まれたりする。こうした母親の思いは看護者の考えとかけ離れたところにあると横尾¹⁷⁾は指摘している。大切なことは、病児であっても母親と共に児の誕生を喜び、労をねぎらう言葉をかける「時」を持つことであり、このことが母親の心の内に耳を傾けることになり、母親の自尊心を高め母性を育てるうえで重要となるであろう。

3. 母親の持つ子どもへの愛着と不安の関係

NICUに入院した児を持つ母親の対児感情と母性意識は、正常分娩をした母親のものとは構造に違いを認めた。NICUに入院した児を持つ母親の不安は、社会理念との間に有意な関係を認めた。こうした関係はNICUに入院した児を持つ母親だけに見られた傾向である。社会理念は「子どもを産んで育てるのは、社会に対する女の務めである¹⁰⁾」などに代表されているため、道徳意識や社会規範の強い母親は、子どもの入院という出来事が母親の理想と異なるため不安を高めている。また、生きがいと接近感情・回避感情の間にも有意な関係が認められた。生きがいは「女性が子育てや妊娠を自らの生きがいとして引き受けるといったことにかかわり母親の生きがい¹¹⁾」を表すため、子どもに対しポジティブな接近感情が強く、ネガティブな回避感情が低いということは当然の結果であろうと考える。しかし対児感情と不安の間には有意な関係は認められず、不安が高いということは対児感情を阻害することとの関連は認められなかった。一方正常分娩をした母親は、生きがいの感情が対児感情・母性意識の全ての因子に影響しており、不安の高い母親は生きがいの感情が低く、回避傾向も強くなる。また、生きがいの感情の高い母親は、児への接近感情も社会理念も高い傾向にある。これは我々がイメージしている子どもを得た母親像に一致しており、正常分娩をした母親の感情を説明するものと考えられる。

我々は、NICUに入院した児を持つ母親において、子どもに対する直接的な胎児感情が母親の高不安を説明すると考えていたが、むしろ子どもを入院させてしまったことに対する母性意識（社会理念）が高不安を説明している。また正常児の母親に比べ生きがいと他の感情との関係が少ないのは、母親が高不安状態にあるため感情が抑制され、本来の感情が表出されていないためと考えられる。そこで、NICUに入院した母親の高不安を軽減させるために、特に社会理念の高い母親においては、

母親の理想と異なった出産・児の入院について自身の感情をすなおに表出できる環境を整えることが重要であろう。そして母親が児にタッチングなどの早期接触を行い、母親の養育行動を引き起こし、児のケアが母親の生きがいに結びつくよう支援することが有効であろうと考える。

謝辞 最後に、本研究の成果は、出産間もないお母様方のご協力によって得られたものです。調査に快く協力して下さいましたお母様方と、産院のスタッフの皆様方にこころより感謝いたします。

引用文献

- 1) Bowlby, J.: Attachment and Loss. vol. 1, Basic Books, New York, 1969. (黒田実, 他. 訳: 母子関係の理論 I. 岩崎学術出版社, 東京, 1979.)
- 2) Ainsworth, M.D.S.: Attachment and dependency: A comparison. In J.L. Gewirtz (Ed.), Attachment and dependency, V.H. Winston & Sons, New York, 1972
- 3) Marshall H. Klaus, John H. Kennell: PARENT-INFANT BONDING (竹内徹, 他. 訳: クラウス ケネル 親と子のきずな. 医学書院, 東京, 1985.)
- 4) spitz, R.: Die Entstehung der ersten Objektbeziehungen. Klett Verlag, Stuttgart, 1962. (古賀行義. 訳: 母子関係の成り立ち. 同文書院, 東京, 1965.)
- 5) 山下修司: 親子の間にこころの絆をどう築くか, 小児看護 20(12): 1647-1651, 1997.
- 6) 氏家達夫: ハイリスク児の発達と母子関係, 発達の心理学と医学1(1):67-77, 1990.
- 7) Brockington, I. F., Kumar, R.: Motherhood and mental illness. Academic Press. 1982 (保崎秀夫監訳: 母性と精神疾患, 学芸社, 1988.)
- 8) 吉田敬子: 母子と家族への援助, 妊娠と出産の精神医学, 金剛出版, 東京, 2000.
- 9) 関口宏美他: NICUに入院した児の両親の

- 当科初回面会前から接触面会後における不安感情の推移：自由記載によるアンケートを分析して．日本新生児看護研究会誌1：20-28，1994．
- 10) 横田正夫他：NICUに入院した児の両親の不安と両親への援助．日本新生児看護学会誌6：2-8，1999．
 - 11) 大日向雅美：母性の研究，その形成と変容の過程：伝統的母性観への反証，川島書店，東京，1988．
 - 12) 山本あい子：胎児への愛着に関する研究結果と今後の課題．看護研究29(2)：139-145，1996．
 - 13) 花沢成一：母性心理学，医学書院，東京，1992．
 - 14) 横田正夫他：母性意識・対児感情による出産時体験の予測．母性衛生38(1)：50-56，1997．
 - 15) 堀内 勁他：カンガルーケア，メディカ出版，大阪，1999．
 - 16) 原田真由美：極低出生体重児の母親の愛着の形成過程とその要因．日本新生児看護学
 - 17) 横尾京子：ハイリスク新生児の看護とQOL：障害に対する看護者の価値観．Neonatal Care 12(4)：566-569，1999